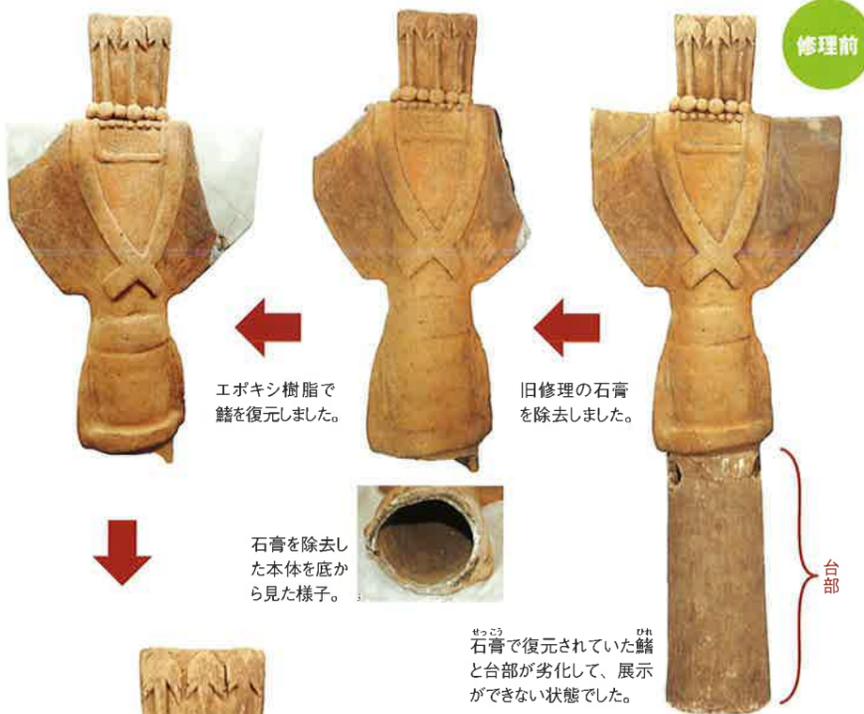


埴輪 鞆

はにわ ゆき [J-7358]

古墳時代・6世紀
1個 群馬県太田市西長岡出土
高 67.5cm 幅 37.0cm
修理 有限会社 武蔵野文化財修復研究所



エポキシ樹脂で
罎を復元しました。

旧修理の石膏
を除去しました。

石膏を除去し
た本体を底か
ら見た様子。

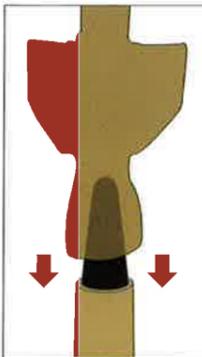
石膏で復元されていた罎
と台部分が劣化して、展示
ができない状態でした。

修理のポイント 後補部分は本体とエポキシ樹脂の間にアクリル樹脂の間層を作ること、将来必要ときに、本体を傷つけることなく、新しく作った部分だけを取り外すことができます。

安定台を新調したことで、安全な展示ができるようになりました。



側面から見た装着部分。



本体との取り外しが可能な差し込み式の安定台を作製し、重心を下げるための錘の台と一体化しています。

修理後

ヴィシュヌ立像

ヴィシュヌリゅうぞう [TC-382]

アンコール時代・12世紀
カンボジア、プラサット・オロック
1軀 砂岩彩色 総高 125.0cm
フランス極東学院交換品
修理 文化財修復工房 明舎



鉄芯を太いステンレス製に取り替え、芯と断面に接着剤を塗ってしっかり固定しました。

修理のポイント クリーニングのときに元の彩色を落とさないよう注意しました。

刷毛や溶剤を使って表面をクリーニングしました。

修理後

バラバラになっていた部分がしっかり接合されたことで、安定した展示が可能となりました。

関連事業

<http://www.tnm.jp/>

見学ツアーのご参加方法は「東京国立博物館ニュース」2012年2・3月号、または当館ウェブサイトをご覧ください。

- 見学ツアー「保存と修理の現場へ行こう」
文化財の保存と修理についての解説及び修理室の見学ツアー
・第1回：3月1日(木) 13:30～16:10 ・第2回：3月2日(金) 13:30～16:10 (内容は第1回、第2回ともに同じです)
対象＝一般 会場＝修理室、X線調査室など 定員＝各回40名(事前申込制)
- 列品解説

日時	解説者	タイトル
2月21日(火) 14:00～14:30	神庭信幸(保存修復課長)	「東京国立博物館の保存修復事業について」
2月28日(火) 14:00～14:30	鈴木晴彦(保存修復課アソシエイトフェロー)	「柳橋水車図屏風の修理について」
3月13日(火) 14:00～14:30	雷坂賢(保存修復室長)	「絵画・書跡作品の保存と修理」
3月27日(火) 14:00～14:30	土屋裕子(保存修復室主任研究員)	「屏風修理の事前調査」

 会場＝平成館1階企画展示室

ヒンドゥー教の神、ヴィシュヌは4本の腕があり、それぞれに法輪、宝珠、棍棒をとります。この像は1本の腕が左肘より先を欠き、棍棒が失われています。腰が高く作られ、上半身の肉付けは柔らかいものの、脚部の表現が硬い点がアンコール・ワットの造営と同じ12世紀の特色を示しています。

本体が11片に割れ鉄芯も錆び、汚れが付着していました。



首の再接合の様子。

東京国立博物館 コレクションの 保存と修理

平成24年2月21日(火)～4月1日(日) 平成館1階企画展示室

本特集陳列は今年で12回目を迎えました。このリーフレットでは、今回展示する作品の中から「小袖 白綸子地桐樹模様」「埴輪 鞆」「柳橋水車図屏風」「ヴィシュヌ立像」の4件をご紹介します。染織、考古、絵画、彫刻それぞれの修理方針、また各修理の工程で判明した制作技法や材料の特徴、修理を行なったことで明らかになった作品固有の情報など、一味違う展示をお楽しみいただければ幸いです。

小袖 白綸子地桐樹模様

江戸時代・17～18世紀
1領 綸子地に刺繍・型染
身丈(右)159.4cm (左)158.3cm
裾(右)74.6cm (左)74.8cm

こそでしろりんずじとうじゅもよう [I-4288]

修理 女子美術大学デザイン・工芸学科工芸専攻刺繍研究室

失われていた衿と裏地を取り付け、真綿を入れて当初の姿に復元しました。



修理前

紗綾形に蘭菊を織り出した白綸子地に、大ぶりな桐樹模様を全身に表わした意匠は、いわゆる「元禄小袖」と呼ばれているものです。花は鍔金糸の刺繍と柔らかな引き揃えの釜糸による平織の刺繍で、葉と幹、雲部分は揃型による摺匠で表わされています。

裏地がないうえに引き解き(仮縫いの仕立ての状態)で、衿もなく、刺繍糸のほつれも多く見られました。

※胸縫い(胸縫い)：細い糸で太い金糸を縫い留める刺繍。
※引き揃え：複数の糸を撚らずに束ね、一本の糸にする。
※釜糸：撚りのない日本刺繍の糸。

欠けていた衿などに新しく織った綸子地の補修裂を当て、補修裂の部分は、文様のつながりに違和感が生じないように似た色に染めました。

修理後



袖が
まるかった
のね

修理後

修理前

修理後

修理のポイント 仮仕立ての糸を解いたことで元の仕立て方がわかりました。袖の形や脇縫いなどを当初の形に戻しました。

真綿を入れ、裏地も新調して、当初の姿に復元しました。

柳橋水車図屏風 重要美術品

りゅうきょうすいしゃずびょうぶ【A-10447】

江戸時代・17世紀 6曲1双 紙本金地着色
 修理 当館保存修復課アソシエイトフェロー：鈴木晴彦、米倉乙世、沖本明子
 外部技術者 国宝修理装演師連盟：山本記子、竹上幸宏

右隻 本紙 縦 154.4cm 横 323.1cm
 表装 縦 164.3cm 横 335.2cm
 左隻 本紙 縦 154.8cm 横 324.3cm
 表装 縦 169.0cm 横 336.1cm

川に架かる橋は華やかな金箔で彩られ、水面には水車や竹で編んだ蛇籠が配され、画面の右には月が浮かんでいます。これらモチーフの関係から、この絵が京都の宇治川に架かる宇治橋を描いていることがわかります。宇治は古来から景勝の地として知られていました。



表装裂



元の裂を参考に、サザンカの花文様を方眼紙に1目ずつ写し取り、図面を起こしました。(文様幅:3.5cm)

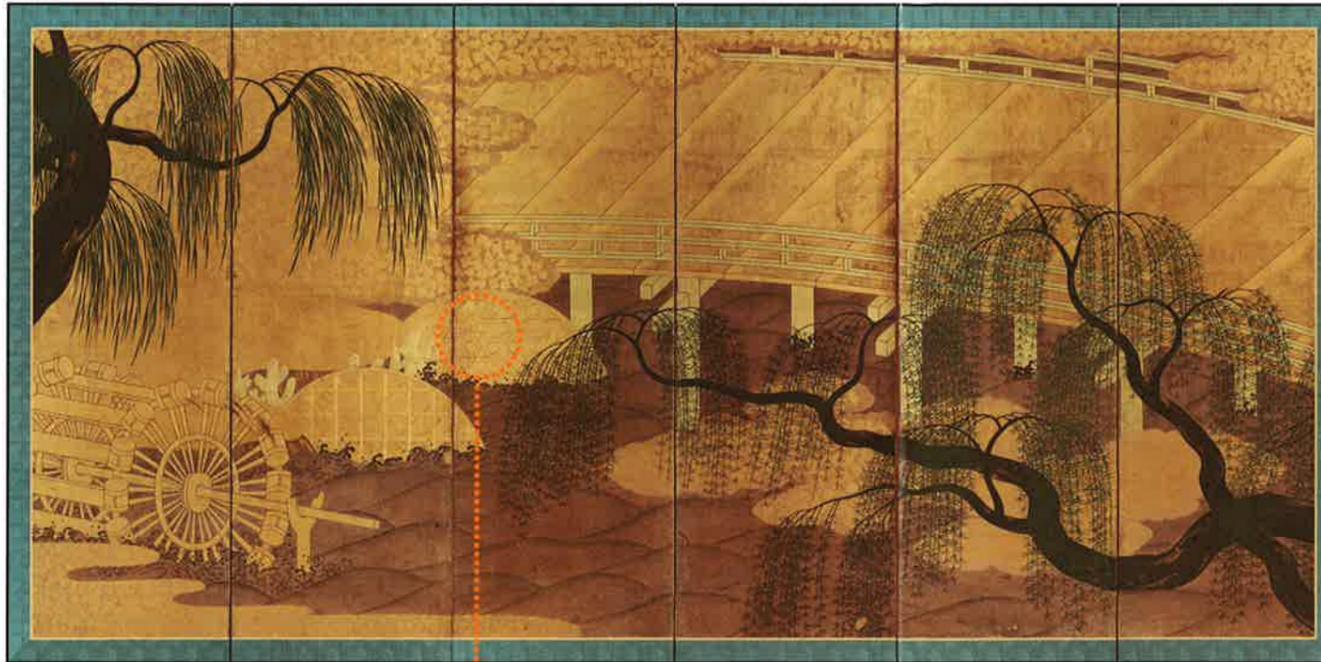
図面から文様を織り出した紋紗の裂。

※紋紗：紗の織りと平織で文様を織り出した裂。

解体作業の様子

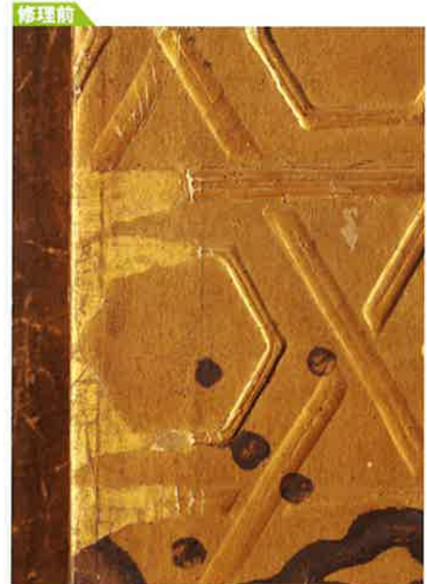


修理前
 画面全体が汚れ、柳の葉の絵具(緑青)もこすれて薄くなったり、なくなったりしていました。水車や籠、橋は胡粉という絵具で盛り上げ、金箔を押しつけてレリーフ状に表現されていますが、絵具にひびが入り浮いている可能性があり、展示や移動の際に取り扱いが難しい状態でした。



修理後

欠失箇所の補填と補彩



金色の古い補紙を除去し、本紙と同じ素材の紙で補修し、補彩しました。

剥落止め

緑青に布海苔を混ぜた膠水溶液を差し込んで、絵具が剥落するのを防ぎました。確実に絵具層が安定するまで、この作業を数回くり返しました。



絵具が定着し、安定したことにより、画面全体が見やすくなりました。

剥落止めに使った材料



布海苔
 フリ科フリ属の海藻を天日にさらしたものです。水に入れると多糖類が溶けて糊状になりますが、接着力はそれほど強くありません。

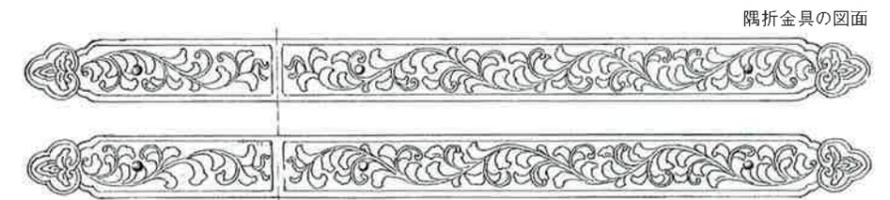
膠
 動物の骨や皮から作る接着剤です。今回の剥落止めには主に牛の粒膠を使用しました。



唐紙と金具 屏風裏面の唐紙を新調しました。



同時代によく見られる唐草文様の金具を復元し、古色付けをしたのち、縁に取り付けました。



隅折金具の図面